

## 源氏物語の創作時期と紫式部の生涯

高 橋 和 夫

(国語・国文学研究室)

### 一、序

紫式部の生涯の中で、いつ、源氏物語のそれぞれの部分が着想され、そして執筆されたのか、紫式部の経歴と、源氏物語の想定個所とを重ね合わせて、この具体的な課題を推定してゆくのは、源氏物語の研究者ととって、最も魅力のある課題であり、かつそれは、源氏物語研究の総決算の位置を占める課題である。

それは、両者の照合という具体的な作業に終るだけではなく、作家紫式部の、思念・魂を、源氏物語の創作過程から逆に投影・記録してゆく、作家的営為を明らかにすることにもなるからである。

紫式部の伝記については、各種資料に基づいて、広く家系をはじめ、出生から没年、さらには子孫に至るまで、多くの研究がある。その異見の幅を一定に持ちつつも、大よその公約的な生涯像が描かれている。

また一方、源氏物語の創作過程についても、これはそれ程論文数は多くないが、紫式部の経歴との関わりの中で、どのあたりでどの部分を執筆したのかという、仮説ないしは推測がなされている。本稿もこれら先行説の後について、私なりの仮説ないしは推測を述べようというものである。

### 二、紫式部の生年と源氏物語染筆との関係

まず、紫式部の生年について、一応今までの諸説を概観してみるが、<sup>注1</sup>ここでは別様の私見がある訳ではない。現在では、藤村潔氏が整理している<sup>注2</sup>られる通り、安和二年(九六九)説から天元元年(九七八)説まで、丁度十年の差の異説があることになる。この幅は、ひとえに紫式部日記の記載を、それが筆者紫式部の何歳の折と見なすかという一事にかかっているのである。注1で記述した外証である紫式部の母方の曾祖父文範の生年九〇七年が、唯一の決定要因で、それに、紫式部に

姉が一人いたこと、惟規を弟と見なして考慮外とすれば、文範の生年は、男は二十歳で、女は十五歳で子を設ける上限で計算すればまだ潮らせることも出来るが、これはもう無意味である。一方出生を遅く見なす限度は、外証にはない。紫式部日記寛弘五年（一〇〇八）の記事を、三十一歳と仮定したのが根拠であつて、あと一歳二歳は若く出来ようが、無理に理由づける必要もないであろう。

ここでの問題は、この十年程も差のある、諸年齢説と、源氏物語の初発の部分で、何年何歳で書き始めたかという執筆時期とを関わらせることである。大略で言えば、染筆を溯らせる程、早い誕生即ち日記時点が高齢である方が無難だが、天元元年（九七八）説でも、執筆初めの時点の目安である夫宣孝の死亡の年、長保三年（一〇〇一）に二十四歳であつて、寡居生活になつてから、即ちこの年だとしても年齢的に差支えないし、また更に溯つて、宣孝との結婚以前、言い換えれば、越前下向の年、長徳二年（九九六）の前年ぐらいとしても、紫式部の早熟度からみて、十七歳であれば、何とか書ける。生年と物語染筆年時との組合わせは、上限はこの辺りであつて、下限の方は全く問題はなさそうである。

### 三、源氏物語各巻の執筆順序の仮定

源氏物語の構想の着想および執筆順に従つて、すでにどこまで、作者の想念の中、あるいはメモ・下書きなどの中にあつただらうかと考

えることが出来る。このためには、はじめに、執筆順序の仮説設定と、それに立脚して、各巻を時間順に組み替えておき、それに従つて構想の継起順序を読みとつてゆく必要がある。

仮説と言へば仮説に過ぎないが、筆者は、先著「源氏物語の主題と構想」で提起したように、物語各巻の執筆順序を次のように仮定しておく。「○印は現今の巻序と異なるもの」

○原桐壺（現今桐壺巻から長恨歌による増補部分を除いたもの）

○輝く日の宮巻（―仮称―欠巻×とも―この「輝く日の宮巻」は、周知の通り、その名称を、定家の源氏物語奥入より借用したものである。仮にあつたとすれば、光源氏十三歳から十七歳までの物語で、帯木三帖とも平行する。）

若紫巻

紅葉賀巻（ただしこの中から源典侍物語を除く）

花宴巻

葵巻（ただしこの中から源典侍物語を除く）

榊巻

花散里巻

須磨巻

明石巻

漣標巻

○（桐壺巻）（長恨歌による原桐壺の増補はこのあたりと考えておく）

絵合巻

松風卷  
薄雲卷

○帚木卷 (帚木系といわれる短節系列のうち玉鬘十帖以前の各

○空蟬卷 卷をここで一括して入れておく。それは苦肉の策かも

○夕顔卷 しれないが、私は、源典侍物語は、両巻でのこの物語

○末摘花卷 の浮動性および源典侍は朝顔巻でその老後の尼姿で出

○(源典侍物語)てくるので、これをも挿入としないで済ませる為であ

○蓬生卷 る。)

○関屋卷

朝顔卷

乙女卷

玉鬘卷

初音卷

胡蝶卷

笛巻

常夏卷

篝火卷

野分卷

行幸卷

藤袴巻

真木柱巻

梅枝巻

藤裏葉巻

若菜上巻

若菜下巻

柏木巻

横笛巻

夕霧巻

鈴虫巻

御法巻

幻巻

匂宮巻

橋姫巻

椎本巻

総角巻

早蕨巻

○紅梅巻 (これは武田宗俊<sup>注4</sup>説による通り、ここに一番落着く。)

宿木巻

東屋巻

浮舟巻

蜻蛉巻

手習巻

夢浮橋巻

○竹河巻 (私も、武田氏そのほか同調される方々と同様、非紫式部説

をとっている。)

源氏物語の執筆順序について、現今の巻序そのままに過不足なく書き継がれていったとお考えの方々には、この仮説の前提自体が誤りのように見えるかもしれないが、本稿の前提としては、この順序で、作者は書き及んでいったという仮定に立つ。

#### 四、源氏物語の初発構想群

初発構想とは、この順序第一の原桐壺執筆の直前において、作者の所持する構想として、現今の構想の中で、どの物語とどの物語であったかということである。今それを列記すると、私は次の七つであったと思う。

紫上物語

光源氏物語

朝顔物語

五節舞姫物語

六条御息所物語

須磨流寓物語

明石一族の物語

今この物語を順に解説してゆくことにしよう。

#### その一 紫上物語

若紫巻で可憐で利漉そうな少女に目をとめ、この少女を盗み出すよ

うにして源氏は自邸二条院に引取る。父親はいるとはいえ、実質的には孤児である。その彼女は、正妻葵上の死の直後に実質的な妻となり、生涯変らぬ夫光源氏の愛を受けて暮らす。他の妻妾はすべて彼女よりも劣るか、あるいはただの愛人関係に過ぎない。女三の宮物語などはまだ全く着想されてもいず、花散里も存在せず、対抗者としては、明石の御方、朝顔齋院、六条御息所の三人だけが想定されている段階では、紫上は独走的に源氏の愛を独占する。しかし晩年、厄年三十七を迎える頃病臥する身となり、六条御息所の死霊に悩ませられる。その出家の願望も源氏に認められないが、しかし、夫の愛惜のうちに死んでゆく。何から何まで幸せそうな彼女には、しかし紫式部は実子を与えず、本当に源氏のマスコットとして生涯を送る。明石一族の物語との関わりの上で、明石姫君を養女として引取って、紫上の地位を固める構想まで、初発時ですでに持っていたかどうかはわからないが、明石入道の娘がすでに若紫巻に噂話に出ている以上は、その構想は、むしろ明石上の忍従の物語というテーマの必要上あったと見なしたい。

つまりこういう単純な構想として、紫上物語は、若紫巻の少女時代から御法巻の死去の個所まで、その生涯のおおよその輪廓は、単純ながらあったと思う。初発時の物語との関わりで言えば、須磨への源氏退去による別離の悲しみ、明石上との養女をめぐる問題、朝顔齋院への嫉み、そして系譜的に藤壺中宮の姪にすること、六条御息所の死霊の出現、そして紫上の死を見送るのは、源氏と養女明石中宮である、この辺ぐらいを考えていたと思う。いかにも一家の正妻格にありなが

ら、最後まであどけない少女の面影が抜けない女性、そして、婚姻としては、二条院に生涯据えられ、後見人としてなく、専ら夫の愛に縋って生きてゆく、しかし夫からは全身で愛される。という通い婚でも婿取婚でもない、愛情の絆のみが頼りという構図である。

かつて清水好子氏は、紫式部集のうち、19番までの、越前下向以前の少女時代の歌群について、「女友だちが顔を並べ、そのために式部は女学生のように爽やかで、時には少年ほく見える。」と書かれて<sup>注5</sup>いる。これ以後の他者の研究論文にも引用される有名な一文だが、この娘時代、女友だちとの交際の中で、あらまほしい自分たちの男性との関わり方、そして、女性の人柄というように、式部は女同士で、女の一生を語り合つたと思う。紫上物語は、そういう女友だちとお喋り舌の中から、友人の少女趣味を代表する女性の物語として仕組まれたのではなかったか。紫上は、源氏物語の登場人物の中でも、歴史上にモデルが見つからず、いかにも空想的人物であるのは、こういう女性は大ぜいいるということではなく、少女たちの空想の産物だったからではないだろうか。物語構想の成立時点という点からいえば、紫上物語の着想は、長徳二年（九九六）の越前下向以前、式部の年齢19〜28以前ということになる。

なおこの機会に、有名な紫式部日記の一部「若紫や侍ふ」の文意について、私見を述べておきたい。

左衛門の誓「あなかしこ。このわたりに若紫や侍ふ」とうかがひ給ふ。源氏にかゝるべき人も見え給はぬに、かの上は、まいていかでものし給

はむ、と、聞きむたり。

従来の諸説の紹介は省略して、私見を述べると、この個所は、左衛門督公任が、ここに源氏物語の作者である紫式部がいることを知って、紫式部「あるいはその同輩をも含め」、「もしもし、このあたりに若紫（源氏物語の若紫に出てくるような可愛い女の子）がいるかね」と、若い女房を探していられる。この男衆の中で誰も、まして公任様でも、源氏の君に似ている（この本文をとる）人もいらつしやらないのに、その方と釣合うかの上（今はかの上になつている―上―の初見は蓬生巻である―）など、ましてどうしていらつしやるでしょうか、と、私は黙つて聞いていた。

これが私見である。今までの説は、さだ過ぎた紫式部に直接公任が「若紫」と呼びかけたから年齢が不自然で、ここに疑問があつた。だからとて、「我が紫」と萩谷説のようにするのは、「若紫」が折角源氏の巻名であるのを無視することになる。私のように訳せば、若紫少女を書いた式部さんなら、それに似た子を知つてるでしょう、という呼びかけになり、この場によく合う。それに対して紫式部は、ただに左衛門督だけを男と見ず、この土御門殿の現実を、「源氏―紫上」という理想世界との対比として、その想いの中に自らを置いたのである。こう訳してこそ、紫式部日記の自省と観察の精神がよく出てくるのではないか。

## その二 光源氏物語

これは、源氏物語前半藤裏葉巻を通り、若菜上巻冷泉帝退位までの主要骨格をなす物語で、研究者諸賢の研究論文も夥しい量に上る物語である。迫害を受ける桐壺更衣とその死・皇子誕生・高麗人予言・臣籍降下・葵上との結婚・藤壺との密通・皇子誕生・皇子即位・栄達・准太上天皇位処遇・冷泉帝子なくして退位、こういう構想として見ると、いかにも奇妙な物語ではある。その最後を藤裏葉巻での栄華の極点に置かず「内裏の帝、位に即かせ給ひて十八年」の箇所をもって終結とするというのが、私見である。こういう物語の着想を紫式部がどこから得たのか、今の所私にも完成した考察はない。源泉としての事実が、伊勢物語二条後の段およびその原拠の二条高子をめぐって現実、少なくとも噂として陽成天皇の素姓に疑いがある点、紫式部の家系に伝承されていたとも考えられる。先祖の兼輔・定方の栄華は、この不祥事によって光孝天皇が即位したから偶然に齎されたのであって、陽の目を見た勸修寺家にまことしやかに伝わっていたのかもしれない。

あるいは、これも式部が愛読してやまなかつた史記その他中国の古典から着想を得たものか、史記の源氏物語への参加については、源氏物語の諸所に源泉として指摘されるが、むしろ須磨流寓物語関係に多い。非常に原型質的に言えば、光源氏の運命は一旦不遇に墜ちる宿命を含んでも考えられるが、そもそもとは言えば、須磨流寓物語は別個の構想で、そもその光源氏物語は、帝位に即けなかつた源氏の恨み

といった、何か薄暗い物語のような気がしてならない。

この光源氏物語は、別に藤壺物語として、違った角度からも見られるが、この藤壺中宮を正面に据えて、光源氏との秘密の愛という側面を強調するのは、初発構想ではなく、執筆中に、作者の描写力の中から形成されて来たものであろう。

また光源氏の生涯の中で、初発構想の中に臘月夜尚侍との密通、源融をモデルにする着想、二条東院・帚木以下の系列・六条院・玉鬘の並びの栄華などはまだなかつたと思われ、光源氏物語としてだけならば、ひどく単純な物語だつたと思う。こういう王統の不祥事が秘密に実現し、かつ消されるというのはどういふことなのかということが、王権をめぐる重要な課題である。本稿では、その基礎としての初発構想は、若菜下巻の冷泉帝退位で終結する、ということを強調したい。

このテーマの着想年時は指定出来ないけれども、これが源氏物語の根幹であるという意味で、この物語が着想された時が、即ち源氏物語執筆の決心がついた時ということになろう。

## その三 朝顔物語

親王の娘として、紫上と同格の、これは皇室家族圏の物語注の中の登場人物としても皇室圏の内側の人物である。齋院になるといふ過程を中間に持っているとしても、源氏の求愛を生受け入れない人物として、これも紫上との対比上、やはり少女たちの、男に慕われても未婚で通すという、やはりロマンティックな憧れに発した人物として着想

されたのであろう。

#### その四 五節舞姫物語

現今の源氏物語では、この五節の初出は、花散里巻で、源氏が中川の女を訪ねてはみたが、歌だけで体よく追り返された折

かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづ思し出づ。

とあるもので、これだと、どこか前の方に源氏の求愛が書かれていて然るべきである。これは、朝顔姫君も同様で、仮定される「輝く日の宮巻」に書かれていたのだろう。続いて須磨巻で筑紫から帰途の家族の一員として見え、須磨の源氏と歌の贈答をしている。続いて、明石巻と澤標巻に、それからとんで乙女巻に、遂に独身を通した旨書かれている。この役は、夕霧の妾藤典侍に引継がれるが、本人の五節は、親からのどんな縁談も断り、しかも源氏の求愛も受け入れないという人物になっている。身分は父親が太宰大貳、兄が筑前守だから、富裕な受領層である。独身を通すところは朝顔姫君と同じだが、その身分は紫式部クラスである。おそらくこれも、紫式部の女友だちとの会話の中で、その生き方が語られた人物で、しかも、私達が雲の上人の光源氏よりの若君達から求婚されたらどうするか、親は富裕を盾に、多分それ程豊かでない上達部の子息か、または富裕な受領の子息が釣合う、と思っている。光源氏の側室などでは我が家の恥と承諾しなかつた。娘はすねて、遂に結婚もせず、源氏の許にも走らず、「神さび」て行つただろう彼女の心情はあわれである。これは皇室家族圏の物語で

はないので、初発構想がすべて雲の上だとばかりは言えない。

ただ一つ問題になるのは、この五節の登場は、花散里巻が初発であり、この花散里巻は、初発構想には属さない花散里の登場のためにわざわざ設けられた巻であつて、そこに五節がはじめて見えること、もう一つは、澤標巻でこの五節も、源氏の思惑では二条東院に招きたかつたのであつて、これは花散里が二条東院の西の対に移つたのと同じ系列の話となつてゐることである。また少女巻のも、新五節は、花散里に面倒を見てもらつてゐる夕霧が求婚してゐて、これと源氏が旧五節に歌を贈る箇所とは一連だから、この五節舞姫物語は花散里と同じ話題で、「輝く日の宮巻」にはなく、現今の通りで十分だという解釈も成り立つ。だが、花散里巻の突然さをカバーすることを優先したのが私見である。

#### その五 六条御息所物語

この物語に源泉の事実を求めれば、斎宮女御と規子内親王の母娘になるが、時代が上りすぎて、執筆時期決定の材料にはならない。それはそうとして、御息所は夕顔巻の裏方になつてゐて、もし「輝く日の宮巻」を仮定すれば、夕顔巻に平行して書かれていたと思われる。そのありうべき筋書については、一応帰納は出来、初発構想の物語であること、論を俟たない。それでは、この六条御息所物語は、初発時点において、どこまで構想されていたのだろうか。

この御息所母子の経歴を簡条書にして示すと、次のようになる。

- (一) 光源氏は宮中で知り合った故前坊妃を自邸の六条京極に追い、ここで懇ろになるが、すぐ熱は醒める。(輝く日の宮巻)
- (二) 葵上に生霊となつて取り憑き、死に至らしめる。(葵巻)
- (三) 葵上の死後、御息所は源氏の妻に嗜れてなるかという期待を裏切られ、彼女は娘に連れ添つて伊勢に下向する(櫛巻)
- (四) 御代替りで母子は上京するが、御息所はまもなく病み、源氏に娘を託して死去する。
- (五) 源氏は、好色を抑え、藤壺中宮と謀つて、前斎宮を冷泉帝に内させる。(濡標巻)
- (六) 絵合に託して、前斎宮を中宮にする。(絵合巻)
- (七) 六条院西南の町は中宮の旧宅である。(乙女巻以降)
- (八) 冷泉帝退位に伴い、中宮も退く。(若菜下巻)
- (九) 紫上危篤、六条御息所の死霊出現。(若菜下巻)
- (十) 死霊、女三の宮の出家をあざ笑う。(柏木巻)
- (十一) 源氏、秋好中宮と御息所の妄執を語る。(鈴虫巻)

この梗概のうち、(七)の六条院の構想は後の着想だから省いてもよいが、中宮旧宅はそのままである。(十)は女三の宮物語なので、初発構想にはない。(六)の絵合という競技自体は初発になくともよい。

こうして眺めると、六条御息所物語の初発部分は、御息所の死去までが考えられていて、源氏と御息所だけなのか、あるいは、この秋好中宮の立身までも含み、御息所の死霊出現までも初発構想にあったのか、という選択になる。私はこれは後者だと思う。それは、一方で

は、紫上の死までが初発構想にあるという前提に立てば、御息所の死霊がそれに関わっており、それは、六条御息所物語の本質的部分と思われる遊離魂が働くのが、葵上・紫上という初発構想の人物に深く関わっているからである。

作者は、前坊の未亡人とその娘、伊勢下りのテーマを斎宮女御母子から着想した。この悲運の女二代に形象賦与として、母親に遊離魂を与え、生前は葵上に関わらせ、死後は紫上に関わらせた。男の不実を責めるというよりは、作者は愛する男の周辺の女に取り憑き、同性をさいなむのが女の本性であるという悲しい業を自らの身に、また女友だちの身の上に見たのであろう。

構想としては、伊勢下りは准拠による。斎宮の立后、そうした源氏の篤志にも拘らず、女の恨みの業は死後も消えない。という、鈴虫巻での語らいまで、すでに初発構想にあつたと思う。御息所がその霊を休めるのは、源氏の努力ではなく、娘の仏道功德なのだということで鈴虫巻を結んでいる。こうだとすると、このテーマも、紫式部の交友の中から生まれたのだろうか。そうかもしれない。しかしこんな高度な、しかも母子二代にわたる物語を、彼女の女友だちが語つたとも思えない。六条御息所物語は、女という同性を観察した紫式部の作家眼の産物だと思う。そうだとすると、紫式部の年齢はなるべく高い方がよさそうである。



## その六 須磨流寓物語

左右大臣家の対立が、御代交替によって一挙に爆発し、右大臣家専権の世となり、源氏の官位剝奪、須磨退去を招く。しかし天変地異と故院の亡霊により、また御代が改まり、光源氏は左大臣家と共に復帰する。この基本構想が初発構想に属するであろうことは異論のない所であろう。しかしこの初発構想は、明石一族の物語とは元来は別物であった。また、右大臣一家の迫害が源氏須磨退去の直接原因で、臈月夜尚侍との醜聞が退去の原因となっているのは、花宴巻の執筆時点と関わる、次の段階での着想だと思ふ。なぜなら、源氏の須磨退去は、政治情勢の不利から直接導き出される事柄であつて、臈月夜尚侍との事は、弘徽殿女御を怒らせた原因に過ぎないからである。

ところでこの須磨退去は、歴史上のどの事件を源泉としているのだろうか。平安朝史の上で、菅原道真・源高明・藤原伊周の三人が古来から挙げられている。このほか、具体的な須磨という地への籠居は、古今和歌集の在原行平の故事であること確実である。この三人のうち、道真は本文中にその詩句も引用されているが、行動全体をモデルにしたと思えない。またこの人物では歴史資料に拠らざるを得ない。次に源高明の左遷の、この安和二年（七六九）は、紫式部の生年の上限の年であり、式部の記憶にはあり得ないから、もし源泉であるとすれば、史料かまたは大人たちの伝聞によることにならう。河海抄の料簡の記事を見直す意見もあるようだけれども、今日私たちが知り得る源泉たる証は、類似点として、河海抄の言う「一世の源氏左遷の跡は相

同じけれども」だけであつて、それ以上深い関係はなさそうである。

その河海抄は「謬説也」と退けているが、「光大臣伊周公を光源氏に擬す」というのが一番当を得ていると思ふ。この私見はかつて述べた所だが、<sup>注7</sup>この伊周左遷の年時を見ると、長徳元年（九九六）四月、播磨に流謫、しかし同年十月都に逃げ帰り、妹定子の中宮御所に隠れているのを追捕、今度は勅命通り、太宰府にやられた。翌三年（九九七）四月、東三条院御惱平癒祈願の大赦で帰京を許された。紫式部の年齢を照合すると、九九七年は、二十歳乃至二十九歳となる。内大臣まで極めた廷臣にしては、何と不甲斐な逆境での処し方だろうか、作者は女ながらも、古典に見出した毅然とした群像に対し、もし為政者が時勢の変にあつて謫居する時はこうあるべきだと、そのモデルを示したかたのであろう。須磨巻前後、文章の端々によく注意して読むと、この主人公光源氏の無実への自負という信念が、いく度かゆらぎながらも最後まで貫かれているのを知る。噂に聞く伊周の不甲斐なき、それとの対比。須磨流寓物語の着想・執筆動機が藤原伊周の左遷とその赦免にあるとすれば、須磨巻はじめその前後のあたりの執筆時期の上限は、長徳三年（九九七）になる。式部の越前下向がその前年の長徳二年（九九六）の夏か秋、帰京が同年晩秋と思われるから、須磨流寓物語執筆期間は、どんなに早くても越前帰京後であり、宣孝との結婚成立を、通説のように、長徳四年（九九八）の冬から翌長保元年（九九九）の初春までの間とすれば、この結婚を挟んでの時期となる。もとより、こういう社会事件のテーマは少し遅らせてもいいから、宣孝

に死別してからを執筆時期とするのを妨げるものではない。

### その七 明石一族の物語

ある見方からすれば、源氏物語はすなわち明石一族の物語だとさえ言える側面を持っている。紫上物語は源氏のマスコット物語に過ぎない。光源氏の宿世も冷泉帝に子がなく結局不毛だったではないか。六条御息所はじめ源氏の女たちは皆ただそれだけで、別しては、宇治十帖は、明石一族に属する匂宮の勝利、非明石一族である薫の敗北の物語だと言えないことはない。後年の村上源氏を予告しているような光源氏家は、その外祖に明石入道を持つことによって摂関藤原氏に対峙する家柄となった。しかし光源氏の王権行使は彼一代の話題に過ぎなかった。

明石一族の中心人物明石上は作者紫式部の最も近い自画像である。詳しい考説は別に記したが、<sup>注</sup>ここで必要なだけの概略を述べることにする。この物語の着想は、おそらく幼年時代から、父為時や伯父為頼、また母方の為信、その母雅正妻である定方娘たちから聞かされ、長じては自分でも記録を調べたと思われる我が家の栄光にあった。定方の娘胤子は醍醐天皇の母、贈皇太后。その上雅正の父は堤中納言兼輔で母は定方娘で定方とは二重の縁である。一方母系は為信父は従二位権中納言の文範、その兄は従三位大宰大貳国章。共に受領に墮ちて終ることなく、叩き上げて父祖以来の上達部の座を確保した。受領に墮ちたのは、ほんの、祖父雅正・為信の時からなのだ。父為時は、このく

やしさを恢復する方途として、大学寮出身の学者・文人貴族の道を選んだ。「文に心を入れたる親」である。

父為時は、安和元年（九六八）十一月に播磨権少掾に任じられたのが初見で、遷任でないとすれば現地に在任期間中、主に居たことになる。式部の出生を早く見ると、彼女も播磨で生まれた可能性があることになる。為時は貞元二年（九七七）三月二十八日、太政大臣兼通邸で行われた東宮の御読書始の儀で副侍読を勤めた。この頃から東宮を囲む文人たちと縁を深めたので、東宮が永観二年（九八四）八月即位して花山天皇になると、為時は式部丞・蔵人に任せられすぐ十一月には式部大丞に昇進、しかし翌々年寛和二年（九八六）六月花山天皇退位と共に為時は失職し、その後十年間散位のままで漸く任官したのが長徳二年（九九六）で、それもはじめは下国の淡路守であって、式部大丞よりも低い任官を不満に思い、有名な

苦学寒夜紅涙盈巾 除目春朝蒼天在眼

の句を含む申文を天皇に奉って、大國越前守に抜擢されることになった。そして長保三年（一〇〇一）春に帰京したが、この年の四月二五日に娘の紫式部は夫官孝を喪っている。

明石上を式部の自画像であるという見地から、これが作者の家系から来たものであることを証明するには、もっと詳細な研究が必要であるが、おおよその事情は次のようなものであろう。紫式部の想念の中には、二つの課題が生まれた。一つは物語の中に、受領層から再び皇室の中に血統を結ばせること、それを式部は、かつて父親の任官地で

あつた播磨に選んだ。そして娘一人を持つ播磨前司に、女系によって、この娘を国母の母とする摂関制に組み込む。摂関の兼家・道隆が受領の娘を妻としているすぐ近年の例がある。むしろその方が普通である。長徳三年（九九五）に天下を取った道長の方がむしろ例外なのだ。この娘一人というのを、もし宣孝の死によって、自分の像を娘賢子に再投影したものとすれば、明石一族の物語の着想・執筆は、長保三年（一〇〇一）以降の、紫式部は源氏物語の執筆を、夫の死後寡居生活の中で書き始めたという通説が有力になる。父祖の栄光再現の物語を、式部は一旦は沈淪した入道の家系の女系による復活として物語化したのである。

もう一つは作者自身の結婚問題であつた。宣孝の結婚時長徳四年（九八八）の年齢を、四十六歳とすれば、式部は、二十一〜三十歳で、二十五〜十六歳年長になる。紫式部集で見ると、宣孝以前に式部には男関係はなかつた。おそらくそうであろう。かりにどの推定幅をとつても、初婚の彼女としては、恋愛結婚でもないのに年齢差・それに先妻もまだ健在というのは、何等かの説明を要する。式部の年齢を二十一年にとれば、何でそんな年齢の差を、となるし、逆に三十歳にとれば、それまでどうしていたのか、ということになる。

私見によれば、この結婚は、この時点の、この環境で、女である妻としての立身が叶えられる一杯の線だつたと思われる。父の邸の中だけで暮らし、自分の結婚は父任せにするしかない家庭環境である。しかし為時はその親族関係を頼つても、また文人としての交際を頼つて

も、この年齢もかなりな娘に、もう上流の若君達を婿取することは不可能だつたと思う。受領層の、それもかなりな年齢になろう。十代の娘ならまだ何とかなつたかもしれないが、第一に本人が、そして家族も、父祖の栄光を捨てられなくて高望みをしていたのだから。そこで、パーゲン・セールでぎりぎり一杯の限界点にいたのが宣孝だつた。彼の父は正二位権中納言為輔である。本人はこの年齢でまだ正五位下山城守だが、この頃は、従三位非参議の上達部はもとより、受領經由で参議にもなつた男は、道長が天下を取つた長徳元年（九九六）以前はかりいたのである。そうだとすると、藤原宣孝は、かつて筑前守にもなつた、今は山城守、そうすると、太宰大弐という受領の頂点に達し、やがて従三位の京官を経て、参議になるのも夢ではない。そうすれば自分が生んだ娘を後宮に入れて、皇子誕生も夢物語とはいひ切れないのである。これは宣孝が長生きすればの話であるが、彼はまことに壮健であつた。紫式部が父祖の栄光を恢復する夢を託せる唯一の男だつたのだから。

この、明石一族の物語は、源氏物語の中では、若紫巻に、紫上登場と並べてすでに語られているから、これが初発構想であることはまちがいなく、すでに述べたように、若菜下巻の住吉詣まで、一貫してもう初発時に概観はまとめられていたと思われる。この初発構想の物語七つがすべて揃つた上で源氏物語は執筆されたと思われるから、この明石一族の物語の明石上自画像を娘賢子に再投影したものとすると、源氏物語の執筆は夫宣孝の死後寡居時代にはじまるということにな

る。しかし私は、むしろ宣孝の生存中、結婚後あるいは直前、あるいはさらに宣孝との交際がまだなかった娘時代でも、自分が光源氏のような、今は不遇だが、やがて復活する可能性のある上達部志向の上流貴族相手の夢を見ていた、そして女の子を生んで、その子を……、と思索すれば、ここに明石一族の物語は出来上る。主人公が光源氏であるから、それと自画像明石上が居て、その間に女の子が生まれる構想さえ、技術的に難がないように仕上げれば、架空の物語は出来上がる。彼女にとって、むしろずっと難しかったのは、現実には自分の夫にその可能性のある男を迎えることだった。上達部夫人になる夢、家族の協力で曲りなりにもその見込みのある男が通ってくれるようになった。そして娘も生まれた。紫式部は、自分の前途の開けて来たことを知り、源氏物語の筆もはかどったと思う。

以上の初発構想の七物語が紫式部の想念の中に形をなして、これが筆先から文字となり始めたのは、いつだろうか。今までの検証により、それを決めるのは、須磨流寓物語が伊周左遷・召還の史実に対する紫式部の人間観の反映とすれば、早くても召還の翌年、長徳三年（九九七）年だが、この翌年長徳四年（九九八）に宣孝と結婚している。即ち、越前に居た一年の間、そのつれづれと都を慕う心が、源氏物語を書かせるようになったか、帰京した四年、宣孝との結婚直前からか、あるいはその秋宣孝と結婚した直後から書きはじめたか、あるいは宣孝の死後まで下げていいか、ということになる。

一方、明石一族の物語は、賢子の再投影がなくてもいいとすれば、

これは、少女時代の夢を追えなくなった頃、この全体構想が出来たものとしたい。

それで私は、推測に過ぎないが、源氏物語は、宣孝との結婚の直前あたり、越前から帰京した直後頃、原桐壺が執筆されはじめたのだという仮説を持ちたい。

## 五 源氏物語の第二次構想群

光源氏の青春時代を締めくくるあたりに、花宴・花散里という二つの短い巻がある。

まず、花宴巻。この巻の構想上の突然さについては、すでに風巻景次郎氏が委曲を尽くして論じていら<sup>注10</sup>れ、花宴巻は、葵巻の一節と共に追加的挿入の疑いがあると言われるが、私はそこまで、つまり執筆順位の変更までしなくてもいいと思う。また藤村潔氏は<sup>注11</sup>、「本来、葵巻の巻頭の部分に予定されていた構想」だと、三つの理由をあげて言われたが、別にそうしなくても、今のままでも矛盾はないと思う。

この花宴巻は、一方では、桐壺帝在位最後の行事である、一院行幸での紅葉賀と並べて、翌春の南殿の桜花宴で、治世の終末を飾り、一方では、右大臣家に藤花宴を催させることによって治世の交代を予告する、その表向の場面を描きつつ、朧月夜尚侍を新たに着想して、これを初発構想である須磨流寓物語にからませたのだと思う。

朧月夜尚侍物語というのを設定すれば、これは、ここでの第二次着

想で、彼女を登場させるために、短いこの巻を設定したのである。ではどうしてこの物語は必要とされて来たのだろうか。

まず第一に、光源氏を取り巻く女性群像の中に、今まで非皇室系の女性はい人もいなかった―墓上も母は大宮である―のを改めて、ここに純粹に藤家の子女を関わらせたことが指摘されよう。

第二に、こういうあでやかな女性が今までの所いなくて、どれもこれも生真面目な女性ばかりだったので、ここで朧月夜尚侍のようなタイプを思いついたことを挙げよう。

第三に、須磨流寓物語を、純粹に政治的理由に帰しては物語としておもしろくないので、朧月夜尚侍を語らったことが弘徽殿女御父子の反感を買って、むしろそれが理由でも、興味本位で源氏物語を読んでいる読者には受け取れるように仕組んだと思われる。

第四に、光源氏の須磨（実際は明石）から帰還する際に、これは、時の帝の赦免が必要だったことが、明石巻に見える。この実像については、すでに述べた所で、<sup>注12</sup>宮中クーデターだと思われるけれども、朱雀帝という宮廷の中心人物の意向が、彼の最愛の尚侍が帝を裏切つて源氏に心を寄せているという仕組みによって、須磨・明石にいる光源氏に筒抜けになっていて、源氏が適確な判断が出来る裏ルートに朧月夜尚侍が関わっているらしいことである。丁度この後、光源氏の米華が、蔭の子冷泉帝の意向が手にとるようにわかる仕組みの上に築かれているのと同じである。

この朧月夜物語が、果してずっと後の、彼女の出家（若菜下巻）ま

で、この第二次構想着想の時点ですであつたのかどうか、現今の源氏物語からは、推定のしようはない。

次の第二次構想は、花散里の登場である。

麗景殿と聞えしは、宮たちもおはせず、院崩れさせ給ひて後、いよいよあはれなる御有様を、ただこの大将殿の御心にもて隠されて、過ごし給ふなるべし。御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめき給ひし名残の、例の御心なれば、さすがに忘れも果て給はず。

源氏物語の一員となる因縁は、この本文が語っている。三の君と知り合うきっかけは、朧月夜のそれをもっと軽くしたようなものであつたろう。

まず、その契機は、姉が桐壺帝の女御の一人だつたということである。この物語は、帝の退位、そして崩御に伴なう後始末を、院が光源氏に託したということである。経済的不如意をカバーすると共に孤独な境遇を慰める心の使者、光源氏の役割は、その妹三の君を愛人の一人とすることによって、さらに重要度が加わる。

濡標巻の、

二条院の東なる宮、院の御処<sup>とよみ</sup>分なりしを、二なく改め造らせ給ふ。花散里などやうの苦しき人々住ませむなど、思しあてて繕はせ給ふ。

この二条東院改造の話題が、花散里系のそれであり、従つてもう花散里巻執筆の時には、二条東院構想は立てられていた。このことは、桐壺帝崩御という榊巻の時点で、花散里物語の構想が着想されたことを示している。これは貧女吟の課題である。<sup>注13</sup>御代替りというのは麗景殿

女御一家のような没落女性を作り出す。表の政権争奪といった男の世界の問題だけではない。裏には女性の生活困窮化が待っている。

さらにもっと広く、彼女の周囲を見渡すと、父親が死亡し、その官制内での地位を喪えばいかに上流の姫たちであつても、他の援助を必要とすることに紫式部は気付いたのである。これ即ち、帚木・空蟬・夕顔・末摘花・帚木系物語の三登場人物の運命である。そして雨夜品定め階層論を生じる所以である。第二次構想群として、隴月夜物語・花散里物語について、雨夜品定め論・空蟬物語・夕顔物語・末摘花物語が着想された。それは須磨巻から澤標巻あたりを執筆している間に順次形をなして来て、薄雲巻の終つたあたりで執筆にとりかかったと考えたい。

もしこういう貧女の問題が、作者の宮仕えによる経験に基づくとすれば、この着想は、寛弘三年（一〇〇六）年以降となるが、宮仕えをしていなくても、寡居生活の間に、自分の周囲を見回し、また人伝てに話を聞けば、十分に書ける話題だと思ふ。

もう一つ源典侍物語も、この第二次構想群と思われる。貧女問題と丁度逆、むしろ隴月夜尚侍物語に近い。これは滑稽譚というよりも、宮廷でけなげに生きる女性という、作者好みのタイプである。源典侍物語自体を、若紫系から切り出して帚木系に移すのは、巻を分解すること、抵抗がありました。源典侍物語では、頭中将が活躍すること、桐壺帝の宮廷話であること、末摘花姫君と共通する滑稽譚であること、末摘花物語にも内裏女房の大輔が活躍すること、などからそう考えら

れる。また、苦肉の解決策ではあるが、著名な二箇所の不思議「一人かあまたしも」と「かの十六夜のさやかならざりし」の二つが、源典侍物語部分にあるということで一応の解決がつく。

では最後に、この第二次構想群の着想・執筆は、作者の伝記の上で何年の時だったろうか。宮仕え以前であつて差支えないという以外にその証拠は見出されない。着想のはじめは、内部徴証としては、葵巻の桐壺帝讓位の頃であり、大体出揃うのが絵合・松風巻執筆あたり、そして染筆は、花宴巻・花散里巻は現行巻序通り、そして帚木系と源典侍物語は、下つて薄雲巻の次と考えておく。また式部の伝記年時としては、これらは、次の第三次着想グループと共に、宣孝の死・長保三年（一〇〇一）のすぐ前か、またはその後の寡居時代に関わるのではないだろうか。

そしてもう一つ、源氏物語が長篇の物語として整つて来たことから、桐壺巻冒頭が見直され、故院の御代を、澤標巻冒頭の御八講でしめくり、あわせて長恨歌で桐壺更衣との恋物語を修飾して、その日中比較の文化的意義を強調したのであつた。

## 六、源氏物語の第三次構想群

源氏物語は、薄雲・朝顔両巻の、暗鬱な感じから、次の乙女巻に入ると一転して華やいで始まる。ここに構想の大きな区切りのあることが推定される。端的に言えば、六条院物語の始まりである。

かつて私は、二条東院構想の頃には、六条院の構想はなく、これは乙女巻で急に思いついたものであると考えた。<sup>注14</sup>今でもこの構想の継起的展開ということは改める必要はなく、六条院という季節の理念化は、朝顔巻の春秋問答をうけているのであって、二条東院構想執筆の、松風巻あたりではまだなかったと思う。

しかし六条京極に、光源氏の何等かの邸宅を作ろうということは、実はもう澤標巻あたりで着想されていたのではないかと思っている。それは、この第三次構想の一つの有力な源泉として、光源氏のモデルに源融を設定しようと作者は考えたと思うからである。彼の名前は源氏物語に一箇所出てくる。それは澤標巻の、光源氏の住吉参詣の所に  
河原の大臣の御例をまねびて、童隨身を賜り給ひける。

とあるのから始まる。この御例は、古注以来不明となっていて、ここでも解明するすべはない。源融がここに河原の大臣と見えて以来、光源氏は、松風巻で、

嵯峨野の御堂——栖霞観  
桂の院——桂

と二箇所も模しており、さらに

六条院——河原院

は周知の通りである。光源氏のモデルは、藤原伊周から源融に変わった。これが第三次構想の一つである。ついでに言うと、明石一族の物語の基本形は初発構想でおおよそ出来上っていたであろうが、女三代が一旦大堰に移り、二条東院には入居しなかったという現今の筋は、

可変部分だったろうと思う。ただし、姫を養女に出す構想は、紫上物語との関わりで、両物語を調整する為に必要なことだから、これはあったと思う。

この第三次構想のメインは、何と言っても六条院の栄華である。四季を四町に配す具体的な企画は、朝顔巻の、源氏と秋好中宮との春秋談議をうけてこれを四季に配したものである。それを補強するのが、同じく朝顔巻で作者が強調する、冬の雪をも加えなかった意向であろう。ところでこの六条院物語の一つの特徴は、これが初音巻から野分巻まで、一年足らずの所に収められていることである。

この一年間のモデルが長保五年（一〇〇三）であることは、確実となった。<sup>注15</sup>繰り返すと、(一)長梅雨だった。(二)酷暑の続いた夏。(三)台風の襲来。それに四篝火巻での立秋。と四項目が合致しているからである。そうするとこの玉鬘の並びの源泉は長保五年（一〇〇三）の一年間であり、この着想・執筆をこの年以前とするわけにはゆかないのは確実である。歴史的事実がモデルならば、少々年時が経ってもいいけれど、こういう気象が、それも一箇年通してということになると、四季は毎年繰返すから、同じことなら早い方がいい。そうだとすると、この六条院物語は、もう少し後の藤裏葉巻までを含めて、作者の宮仕え以前、即ち長保五年の翌年の寛弘元年（一〇〇四）かその翌年、寛弘二年（一〇〇五）、（この年の十二月二十九日宮仕説による）が、玉鬘―藤裏葉巻の執筆年時であると、大そう限定されてくる。ただし、このように通説より、執筆時期を繰り上げると、山中裕氏が論述される<sup>注16</sup>光源

氏の道長モデル説、藤裏葉行幸の寛弘五年（一〇〇八）土御門邸行幸モデル説に差支えが来るので、何も宮仕前執筆でなければならぬ訳ではないが、この辺のことは今後の課題であろう。

次に、この第三次構想の一つに玉鬘物語がある。玉鬘が六条院の東北の町の西の対の住人となつて六条院に納まる構想は、六条院の四季構図完成後に玉鬘物語が加えられたかのような不自然さが一方ではあり、また、夕顔物語・玉鬘物語着想の前後関係にも問題はあるのだが、<sup>注17</sup>執筆順序が夕顔物語→玉鬘物語であることに異存はない。ところで、この玉鬘物語の中で、玉鬘巻の北九州での物語はその源泉がはつきりしていて、紫式部集に見られる肥前関係の歌の詞書と伯父の為頼集の歌の詞書から、岡一男氏はこの肥前守は橘為義とし、その娘と紫式部は従姉妹であり、この年次は長徳二年（九九六）であるとされた。角田文衛氏は、橘為義の肥前権守は通任で、長徳元年（九九五）十月に肥前守には平維将が任命されていると反証された。<sup>注19</sup>四年が任期とすれば長保二年（一〇〇〇）の帰京である。この帰京年は、岡氏のようにこの人が橘為義だとしても帰京はこの年であろう。角田氏はさらに紫式部集39番歌の

遠き所へ行きにし人の亡くなりけるを、親はらからなど帰り来て、悲しきこと言ひたるに  
いづかたの雲路と聞かば尋ねまし列離<sup>つら</sup>れけむ雁が行方を

をこの従姉の在地での死と考えていられる。そうすると西国のニュースは従姉からではなく、その親兄弟からということになるが、本稿の

論題からいえばいずれでもよい。要は、玉鬘巻の北九州の話題は、長保二年（一〇〇〇）もしくはその翌年あたりに紫式部が聞き知った実話だろうということである。

源氏物語の第三次構想群に属するものは、乙女巻の、夕霧の元服の折に作者が父親光源氏の口を借りて述べる教育論と、蛸巻の、玉鬘を相手に語る物語論、その他梅枝巻の香論、仮名論など、紫式部の意見開陳である。この以前にも、帯木巻の女性論、明石巻の音楽論、絵合巻の絵画論、朝顔巻の春秋論などあるので、この時期は始まったものでもないが、漸次着想されて、その最もふさわしい所に書き込まれたのであろう。

そして第三次構想群には、夕霧・雲井雁の恋物語がある。これは、光源氏の次の世代の開始を告げるものだが、結婚に対する、家としての姿勢のようなものが眼目で一つの結婚論である。また玉鬘物語も、求婚譚という伝統的な話題もさることながら、光源氏の彼女への愛着という、中年の男心を描くのも、ことによつたら式部自身の宣孝との結婚の思い出が反映しているのかもしれない。

ともかくこのあたり、何か共通して、作者と光源氏は第三者の立場にあつて、物語の展開を楽しんでいるところがある。そして成立年時の外証が、長保二年（一〇〇〇）以後の玉鬘の北九州物語、長保五年（一〇〇三）一年間のモデルという動かせない事実であること  
を思うと、他の構想はそれ以前に着想されたものがあつたにせよ、この執筆時期は、寛弘元年（一〇〇四）二年（一〇〇五）あたり、即ち



宮仕え以前に、藤裏葉巻までは少なくとも出来上がっていたと見たい。

## 七、源氏物語の第四次構想群

源氏物語もこれで若菜上巻に入ることになる。藤裏葉巻終了、若菜上巻始発という時点で、第一次・第二次・第三次構想が、その終結部分はまだ遺されて、文字化を待っていることを、私たちは知っている。第一次構想に属する明石一族の物語は、若菜上・下巻の記述も、かなり細かい部分に至るまでが着想段階ですであつたと私は推定した。光源氏物語が冷泉帝退位で終るものというのが着想段階での構想とすれば、これも若菜下巻まで引延ばされていたことになる。紫上物語、これは御法巻で光源氏に看取られて死ぬことに女の幸福を託したとすれば、その中間段階のどこまでが着想段階にすであつたものか、決め手はないが、発病・六条御息所の死霊の出現だけはすであつたと思う。他は途中で追加されたかもしれない。朧月夜尚侍物語は、元来が須磨流寓物語を脚色するための物語だから、果して、源氏の旧情復活・その出家まで着想段階ですであつたとも思えないので、これは、年齢からみて、ほぼこのあたりにあとで考えついたのだろう。もう一つは玉鬘物語で、これは必ずしもなくてもいいから、あるいは若菜上巻に入ってから、第四次構想群かもしれないが、玉鬘物語の追補部分として認めるのがよい。そしてもう一つ、第三次以前か第四次かはずきりしないものに、鈴虫巻の、冷泉院・秋好中宮の出家願望があ

る。構想の系譜としては共に第一次構想だけれども、着想は、若菜上巻に入ってからかもしれない。以上のように、これらのうち明石一族の物語と玉鬘物語は、これらの人物の現実性を反映して、現世での幸福な生活を波瀾なく描いているが、これ以外の、朱雀院・朧月夜尚侍の実際の出家、遂に出家をさしとめられる、冷泉院・秋好中宮・紫上。この第四次構想染筆と平行した残存物語は、現実と出家の並立であつた。そして後者の出家物語が、大きく構想として座を占めるのが女三の宮物語であつた。第四次構想群に属する物語は、私がここでやや継起的に考えすぎている嫌いもあるが、女三の宮物語・夕霧物語そして橋姫物語である。これらは登場人物を順次に繰って、次から次というように着想されたのではないだろうか。

まず、朱雀院の出家が、旧部分としてすであつて、その院に最愛の娘があり、出家に際して身のふり方を考えあぐねた。光源氏に面倒を見てもらうことにして、この女三の宮と求婚者の一人柏木との密通事件を着想し、薫の誕生を光源氏の反省・応報の物語とする。そして女三の宮の出家でこれを締めくくり、さらに、生まれた薫は成人後、この人物にふさわしい敗北の人生を語ってもらう。それにはライバルに匂宮を設定する。敗北の人生は、まず出だしを、再び桐壺院の皇子に回帰して、これも出家願望の八の宮とその娘二人、場所は宇治。そして私共周知のような橋姫物語の構想を立てたのだつた。

この、出家物語の系列から、一つの派生物語である夕霧物語で、光源氏四十歳代の空白部分を埋め合わせようとしたのだろう。もう一つ、

女三の宮物語の副主題として、柏木から女二の宮↓夕霧↓光源氏↓薫へという横笛伝授物語がある。あと、この、若菜上巻く宿木巻一部に至る第四次着想が支配している巻々で、残っているのは、幻巻の光源氏悲傷の一箇年、光隠れ給ひて後の取り遣された人々の動静を描く句宮巻は、どのあたりで着想されたものか決め手がある訳ではないが、最終的着想としては、第四次着想ということになろう。

これで第四次着想のアウトラインは述べ終ったが、作者紫式部の生涯のどのあたりでの着想・執筆ということになるのだろうか。第四次着想の物語は、以前の着想のように、外部徴証として考証されたものは持っていない。気が付くのは、作者の日記々事との類似という、作者の心的現象の物語への投影ということである。有名な日記のことだから、本文の引用をするまでもなかるうが、ここには出家物語がいくつもあるということを考えると、寛弘五・六年（一〇〇八・九）の、紫式部の出家願望、またはそれと同方向の心的現象である。身を厭い、心を省みる、自己凝視が、物語中の人物に向けられて客観表現をとる時、源氏物語第二部および橋姫物語の基本構想となる。日記の年時にあったそうした心が先で物語が後なのか、すでに物語に書き終えたその心的状態が日記に直接的に書かれているのか、定め難いが、今までのところ、第三次構想の藤裏葉巻までを、寛弘二年（一〇〇五）まで、即ち宮仕え直前に設定したので、この女三の宮物語の着想は宮仕え前にもあったかもしれないが、若菜上巻以降の執筆は、私は寛弘三年（一〇〇六）の宮仕え以後に当てたい。そして、橋姫物語の終結あたりを

寛弘五・六・七年（一〇〇八・九・一〇）あたりに置いたらどうだろうか。誰でもが知っている日記に見られる紫式部の心境に立脚して述べているだけだから、私見に新味があるわけではない。

#### 八、源氏物語の第五次構想群

第五次構想が、それ以前の着想と大きく違っているのは、第五次構想は、第四次構想の末尾橋姫物語の、薫の亡き大君への思慕と弔いおよび中君の皇子出産とによって、宿木巻で完結するが、その宿木巻が、薫の中君への恋慕という、浮舟物語の導入部分の技術的課題と、さらにその前の、薫と女二の宮の縁談とを含んで重なり合っている以外は、着想・執筆共、橋姫物語の中で、予告していることが全くないことである。宿木巻での橋姫物語の残映も、要するに書き遺しておいたというだけで、宿木巻から、第五次構想は、着想・執筆共、独自になされたと見てよい。それでは、第五次構想の物語とは何であろうか。それは浮舟物語を主にし、女一の宮物語―私はむしろ明石一族後日譚と称した方がいいと思うが―を従とした、源氏物語の完結である。

まず、浮舟物語は、二つの側面を持っている。前者は、二人の性格の異った男性に追いつめられて、投身し、此の世ならぬ小野の山里で出家する若き尼僧の物語。後者は、浮舟（乙女）、中将の君（主婦）、妹尼（老後）という三人の女性に見られる女の一生のスケッチ。私はこのどちらにも作者は等しく力を入れて、人生の相として描いたのだ

と思う。それはまことに、源氏物語の終末としてふさわしい。

もう一つの、女一の宮物語は、ひところ、これは大きく出来る物語だったが発展を見なかつた宮廷物語で、その仮構の筋書が言われているが、私は、現在のままで十分だと思う。それは、女一の宮がいかに薫の憧れの対象だからとて、彼女は生き生きとした物語の女主人公になれる人物ではない。こは、むしろ女二の宮の婿になったことによつて、その宮廷身分を得た薫を造型し、彼を明石中宮の所に入らせることによつて、明石中宮の後宮が、いかに優秀か、その落着き、配慮、親愛、教養などで、あらまほしい後宮とそれを主宰する明石中宮を描いた、明石一族の物語の後日譚だと思ふ。そしてここには、漸く馴れて来た、彰子中宮の後宮への、作者紫式部の願望と思入れがあるのではなからうか。日記に、齋院と比較しての後宮論があるというだけでなく、その日記全体がそうである。そしてこのテーマはまた源氏物語の完結を飾るにふさわしい。

以上のような見地からみて、この第五次構想の物語の、着想・執筆は、第四次構想の年次に続いて間もなくとみていいと思う。憶測になるが、今上的一条帝の崩御は、寛弘八年（一〇一一）六月二十二日だから、その辺にからませる必要はなからうが、第四次構想を寛弘七年（一〇一〇）まで持ってゆけば、この天皇崩御の年を、無意味かもしれないが、一年とばして、第五次構想は、長和元年・二年（一〇一二・一三）頃となる。紫式部の没年の最も早い説が、岡一男説の長和三年（一〇一四）の春だから、これで丁度一杯に間に合うことになる。この第

四次・第五次構想に、私見が、他の研究者の推定よりも比較的長年時にとつているのは、宮仕え後は、時間的余裕も心理的余裕も宮仕え以前よりも少なくなつたろうという「いたわり」の為である。

以上で、私の、源氏物語の着想・執筆を、紫式部の生涯との関わりで、その年時を推定してゆく作業を終えることにしたい。これまで発表された源氏物語執筆時期の仮説との違いは、方法的には、着想と執筆という創作過程を二段階に仕組んだことである。具体的な時期としては、執筆開始を、越前からの帰京直後、即ち宣孝との結婚に前後する頃と通説より早めたこと、長保五年（一〇〇三）の一箇年が玉鬘の並び一年間のモデルであることを強調したことである。そして、従来の定説が宮仕え前が比較的、期間と執筆量に余裕がある一方、玉鬘の並びの六条院を現実の土御門殿と重ね、光源氏と道長とを重ねてイメージ化しているのでこの後半部が宮仕え中であるのかかわらず、かなり窮屈なのを、六条院を架空の邸宅として、この枠から解放したことである。

注1 昭和四四年度までの説は、「諸説一覽源氏物語 阿部秋生編 明治書院」に手際よくまとめられており、それ以後の説をここに加えた。

南波浩氏は、出家願望の寛弘七年（一〇一〇）を厄年の一年前、紫式部三十六歳とし、逆算して天延三年（九七五）の生年説をとられた。

〔紫式部の意識基体「同志社国文学」昭和四六年〕

伊藤博氏は、今井説の紫式部日記執筆時の齋院を寛弘六年から七年に

修正されたのは、そうたいしたことはないが、今井氏の推定だと、  
 為信が女を生んだのが十四歳以下になる。

文範——為信（父生）——女（生）——紫式部（母生）

となってしまう。それで、「天禄元年以前出生説をいささかくり下げた方がよい」として「老境の入口と目される四十歳を数年後に臨んで」のこと。さらに岡説に補正を加えて、九七三年の岡説に同調する。（紫式部ノオト—その—出生年時と老いの意識—昭和四十七年三月「九大教養部文学論輯」第19号、後「源氏物語の原点」明治書院 昭和五十五年）に所収。

この為信の年齢の不備は萩谷氏も指摘、「母方の曾祖父文範の生年（九〇九）から起算して従い難い。」とされた上で、今井氏の老眼説を「観念的」「誇張的文章」を額面通り受け取ったものとし、南波浩氏の厄年重視説を、一年ずらしてこの年を三十七歳とし、天延二年（九七四）出生とした。

今井説よりさらに一年程生年を繰り上げたのが重松説で、これは、例の老眼説の日記部分を、物語・日記の「古い」の語例全調査の上で、寛弘五年（一〇〇八）の菊の綿の贈答部分も式部四十歳と見て、安和二年（七六九）出生となる。これが現時点で最も早い出生年説である。

注2 藤村潔 「源氏学序説」笠間書院 昭和六十二年 二三八頁

注3 高橋和夫 「源氏物語の主題と構想」桜楓社 昭和四一年 I 成立編

注4 武田宗俊 「源氏物語の研究」岩波書店 昭和二十九年 第一篇 第六章 「紅梅の巻」の位置

なお、同じ問題は注3拙著も同じ結論を出している。

注5 清水好子 「紫式部 岩波新書」五頁。

注6 風巻景次郎 「源氏物語の成立に関する試論（紫と紫のゆかりの物語全集4）」所収 源氏物語の成立 一六三頁。

注7 高橋和夫 「日本文学と気象 中公新書」所収 源氏物語の台風と嵐 一七九頁。

注8 高橋和夫 源氏物語—明石一族の物語—正・続・続々 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学篇 第34・35・37卷 一九八四・一九八五・

一九八七年

注9 角田文衛「紫式部とその時代」所収、紫式部の結婚 六九頁。角田氏は、「二人の結婚は、為頼・為時・宣孝の三人の間で豫定されたいこと」と言われる。随分穿った見方だが、為頼が娘を源相方によつたのと同じ図りだ（六六頁）というのは話がうますぎるとしても、家族間の取り決めみたいなものはあつたらう。

注10 注6の同書、紫の上と明石の上との物語 一八一頁以下。風巻氏は、紫と紫のゆかりの物語を第一主題とし、これを藤壺への源氏の傾倒が深まれば深まるだけ、二人の中は離れ、后は去つてゆくという筋に見、第二主題を「須磨」「明石」に発する構想というように見、臘月夜事件はこの第二主題を奏でさせるための前奏曲であるとみる。

注11

藤村潔 「源氏物語の構造第二」所収 源氏物語の構想に関する試論 4 花宴の周辺 一五頁

注12

高橋和夫 光源氏の生涯

注13

高橋和夫 源氏物語——それが貧女吟とならないために——群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第33卷 昭和五八年

注14

注3所収 二条院と六条院

注15

注7所収 一五二ページ以下。

注16

②高橋和夫 玉鬘—紫式部の一つの自画像—「源氏物語の探究 第十二輯 風間書房 昭和六十二年」所収 注(8)

注17

山中裕「歴史物語成立序説 東京大学出版会 一九六二年」所収 第二章 源氏物語の歴史的意義 内の各論考

注18

注3所収 IIの六 源氏物語における創作意識の進展について 二五 四〜七頁

注19

岡一男「源氏物語の基礎的研究」所収 第一部 二、紫式部の少女時代及び文芸的環境 六九頁

注20

角田文衛 注9所収 紫式部の伯母と従姉 五二頁。

（原稿受理 平成元年五月三十一日）